OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	18世紀前半イギリス大西洋帝国の形成と海賊鎮圧 : ウッズ・ロジャーズによるバハマの海賊掃討作戦を中心に
Author(s)	森下, 瑶子
Citation	パブリック・ヒストリー. 2016, 13, p. 130-145
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66553
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public, **13** (2016), pp. 130-145 ©2016 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
The Suppression of Piracy in the British Empire in the Eighteenth Century: Why did the Empire change its policy toward pirates?
Yoko MORISHITA

18 世紀前半イギリス大西洋帝国の形成と海賊鎮圧

ウッズ・ロジャーズによるバハマの海賊掃討作戦を中心に

森下瑶子

1　はじめに

「海賊活動の黄金時代（the golden age of piracy）[(1)]」の最中である 1718 年 7 月 26 日、「海賊の巣窟」バハマ諸島に新総督ウッズ・ロジャーズ（Woodes Rogers）が到着した。彼の任務はバハマに巣食う海賊を掃討し、イギリスの植民地として再建することだった[(2)]。ロジャーズは海賊に恩赦を与え、それを拒否して掠奪を続ける者は武力によって討伐した。これにはバハマ周辺の英領植民地も協力し、その結果、バハマは海賊の脅威から解放された。

このバハマの海賊掃討作戦はイギリス国王ジョージ 1 世（George I）の命令で行われた[(3)]。しかしながら、同国は以前から海賊掃討に熱心だったわけではない。それどころか、17 世紀には本国も植民地も、大西洋世界に拠点を持つ海賊に協力したり、その活動を黙認したりしていた。つまり、イギリスの海賊に対する態度は 17 世紀から 18 世紀で変化しているのである。なぜこのような変化が生じたのだろうか。本稿では、その転機として 1718 年から行われたバハマの海賊掃討作戦の決定及び実行の経緯に着目し、変化の理由をイギリス本国と植民地の両方から明らかにする。

この変化の理由について考察した研究は多くはない。多くの場合、M・レディカー（Marcus Rediker）のように、大西洋世界における海賊活動を分析する中で少し触れる程度である。海賊史の大家である彼は、イギリスが海賊への態度を転換した理由を、本国においては議会が貿易を重視し始め、植民地においては支配階級は海賊に頼らずとも富を得られるようになったから

(1)　この時代の定義は研究者ごとに異なる。ここでは P・アールに従い、大西洋世界で活動する海賊の数が爆発的に増加した 1715 年から、その被害の報告がピーク時の 10 分の 1 程度まで減少する 1726 年までを「海賊活動の黄金時代」とする（Peter Earle, *The Pirate Wars*, London: Methuen, 2004, p.163）。

(2)　本稿でいう「海賊」とは、国家による認可のない非合法な掠奪行為を行う者のことであり、国家が発行する拿捕認可状が有効な範囲で掠奪を行う私掠者は含まない。しかし、イギリスで両者の区別が厳密なものとなるのは 1708 年以降であり、それ以前の場合は、拿捕認可状の有無にかかわらず掠奪行為を行う者を海賊とする。

(3)　本稿では、ブリテン諸島を中心とした国家の名称を「イギリス」と統一する。すなわち、1707 年の合同法以前は主にイングランドを、それ以降はイングランドとウェールズ、スコットランドを合わせた国家を指す。

だと説明している[4]。しかし、本国において徹底的な海賊鎮圧が行われるきっかけを作ったのが、貿易商など議会外の勢力だったことにより注目すべきであろう。また、植民地が新たな収入源を得たというのは、彼らが海賊と協力しなくなった理由としては十分だが、18 世紀のように積極的な海賊討伐を行う理由としてはやや弱い。後者の理由について、もう少し踏み込んで考える必要がある。一方、近世の西欧諸国家が関わった海賊活動を広く対象とする A・ペロタン＝デュモン（Anne Pérotin-Dumon）は、その分析を通して国家が海賊に対する態度を変化させるパターンを示した。彼女によると、新規に海上貿易に参入せんとする国家は、その時点で商業の覇権を握っている既存勢力（たとえば、16 世紀であればスペイン）を打倒する際には海賊を頼るが、自身が新たな体制を確立すると方針を変更して海賊の鎮圧に転じるという[5]。海上の覇権をめぐる国家間の争いと海賊の盛衰を結びつける彼女の指摘は重要だが、海賊に対する方針を決定するのはあくまでも各国内部の勢力である。ある国家の海賊に対する方針変更の理由を考えるためには、むしろその内部の社会がどう変化し、それが政治を主導する階層にどう変化を与えたのかという点により注目しなければならない。加えて、彼女の研究ではそれほど重要視されてはいないが、特に近世のイギリスを対象とするならば、その植民地の動向にも焦点を当てる必要があるだろう。

また、バハマの海賊掃討の決定過程については、薩摩真介が「国務省植民地関係文書摘要」を用いて分析し、枢密院の諮問機関で植民地や貿易問題を担当する商務院の活動を高く評価している[6]。だが、海賊掃討を訴えていたのは商務院だけではない。バハマの新総督となったロジャーズも、同じことを求め、その実現に向けて活動していた。見方を変えれば彼が政府に働きかけて要望を実現させたと言える。ロジャーズの働きについては、M・クレイトン（Michael Craton）と D・コーディングリ（David Cordingly）が海賊掃討作戦の決定過程と実行について詳細を記している[7]。だが、両者の研究はそれぞれバハマ史や海賊史の一部としてこの題材を扱っており、背後にあるイギリス社会との関連は不明のままである。

以上を踏まえ、本稿では、イギリスの海賊に対する態度の変化の原因を、18 世紀に海賊鎮圧を求めて活動したロジャーズに着目して分析する。彼がその要求を実現させ、作戦を実行した経緯から、当時のイギリス社会の状況と海賊への姿勢転換との関連を明らかにしたい。その際には、本国と同時に植民地の事情についても考慮する。17 世紀に大西洋世界の海賊活動が活発になって以来、直接彼らを支援してきたのは大西洋に面する植民地だった。だが、18 世紀には植民地も海賊を掃討する側に回っていた。それは一体なぜなのか。本国と植民地、両方の理由を考えることで、

(4) マーカス・レディカー（和田光弘、小島崇、森丈夫、笠井俊和訳）『海賊たちの黄金時代――アトランティック・ヒストリーの世界』ミネルヴァ書房、2014 年、30 頁。

(5) Anne Pérotin-Dumon, 'The Pirate and the Emperor: Power and the Law on the Seas 1450-1850', James D. Tracy(ed.), *The Political Economy of Merchant Empires: State Power and World Trade 1350-1750*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991, pp.196-227.

(6) 薩摩真介「ウッズ・ロジャーズ総督によるバハマの海賊鎮圧 1718-21」『西洋史論叢』第 26 号、2004 年、15-35 頁。

(7) Michael Craton, *A History of the Bahamas*, Waterloo: San Salvador Press, 1986. 及び David Cordingly, *Spanish Gold: Captain Woodes Rogers & the True Story of the Pirates of the Caribbean*, London: Bloomsbury, 2011.

大西洋世界の海賊の歴史を、イギリス本国・植民地の歴史と共に、「大西洋史」の中に位置付けたい。

2　バハマの海賊鎮圧の決定経緯

(1)「海賊活動の黄金時代」の起源

まず前提として、大西洋世界における海賊活動の歴史について概観する。

大西洋世界で海賊活動が活発化したのは、スペインとポルトガル以外の勢力がアメリカ大陸とその周辺の島々へ本格的に植民活動を始めた 17 世紀ころだ。入植者の中で満足な暮らしを送れなかった者が、やがて大西洋やカリブ海で、掠奪によって生計を立て始めた。このような人々を「バッカニア（buccaneer）」という。スペインによるアメリカ大陸独占に反発する国々は、彼らを支援しその船を襲わせることでスペインの弱体化を狙ったが、その一つがイギリスだった[8]。同国はジャマイカという拠点を、その植民地は拿捕認可状をバッカニアに与えた[9]。しかし、世紀後半になると一部の植民地が経済的に豊かになり、海賊との協力を打ち切るようになった。そのため海賊たちは掠奪の場を大西洋・カリブ海から、太平洋や紅海・インド洋へ移動した。イギリス本国も海賊に対する態度を硬化し、新たな海賊法の制定や海軍による討伐を始めたが、決定的な効果はなかった。減ったとはいえ海賊と協力し彼らを保護する植民地はまだ多く、一方で、本国には海賊討伐に熱心な人物がまだ少なかったためだ[10]。

だが、1701 年にスペイン継承戦争が始まると海賊の数は激減する。西欧諸国が海軍や私掠船の強化のため多くの船乗りを必要とし、海賊行為に従事していた者たちが合法的な職を得たからだ。1713 年に戦争が終わるとその大半は解任されたが、大西洋貿易の伸長によって船乗りたちは商船水夫としての働き口を得たため、影響はほとんどなかった[11]。

ところが、大西洋貿易は 1715 年から停滞し、商船水夫の需要も減って船乗りは合法的な職を見つけることが困難になった。また、様々な財宝を積んだスペイン船団がハリケーンに遭い、フロリダ沖に沈んだことで、その富を引き上げようとする私掠者などが大勢同海域にやって来た。彼らはやがて海賊行為を行うようになり、バハマ諸島がその拠点となった。バハマはイギリス領植民地だったが、戦争中にフランスなどによって大きな被害を受け、住民のほとんどがいなくなっていた[12]。無政府状態となったバハマは海賊にとって絶好の隠れ家となった。ここには、イギリス系海賊の掠奪に激怒したスペイン人によってその植民地から追放されたイギリス人も加わった。海賊行為を行う者の数はより一層膨れ上がり、「海賊活動の黄金時代」が始まった[13]。

---

(8)　デイヴィッド・コーディングリ編（増田義郎・竹内和世訳）『図説海賊大全』東林書房、2000 年、69-71 頁。
(9)　Earle, *op.cit.*, pp.90-91.
(10)　コーディングリ編、前掲書、295-299 頁。及び Earle, *op.cit.*, pp.185-188.
(11)　レディカー、前掲書、29 頁。
(12)　Craton, *op.cit.*, pp.87-88.
(13)　Earle, *op.cit.*, pp.159-163.

(2)　バハマの海賊掃討作戦の決定

バハマ諸島を拠点とする海賊たちは、周辺の英領植民地の治安と商業に対する懸念材料となった。植民地住民らはその脅威を本国へ訴えていたが、その内の 1 人がヴァージニア副総督アレクザンダー・スポッツウッド（Alexander Spotswood）である。彼は、大量の海賊によって周辺のイギリスの商業が大きく損なわれていることについて、書簡で海軍本部や商務院に訴えた(14)。しかし、国王や大臣、枢密院など政府中央部は海賊問題に大きな関心を持たなかった。彼らの関心は英仏関係をはじめとする外交問題であり、貿易問題である海賊は、彼らにとって特に優先的に解決すべきものではなかった。これを受け、商務院は、バハマの海賊掃討実現のため、政府中央部が関心を持つよう、バハマの重要性を外交問題に絡めて説明した。バハマが海賊のはびこる無政府状態のままでは、スペインやフランスがバハマへ入植し、支配することになる。バハマはカリブ海貿易の要所であり、これを取られることは絶対に避けなければならない。商務院はこのように主張し、解決策としてバハマを王領化してイギリスの直接的な管理下に置き、国王が任命した総督を派遣することを提案した。当時バハマを統治していたのは国王から特許状を受けた領主たちだったが、商務院は、領主らが必要な措置を怠りバハマの「海賊の巣窟」化を招いたとして、彼らにバハマの管理を続けさせることはできないと考えていた(15)。しかし、バハマの領主らはこの案を受け入れず、自分たちと関係の深い人物を総督にして利権を保持しようとしていた。これは国家によるバハマの管理を目指す商務院には容認できない事態であり、彼らは独自に総督としてふさわしい人物を探す必要に迫られた(16)。

その一方、公的機関とは別にバハマの海賊問題解決を目指す集団が存在した。それが、元私掠者のウッズ・ロジャーズが率いる「貿易再開及びバハマ諸島植民のための協同組合（the copartners for carrying on a trade and settling the Bahama Islands）」（以下、「バハマ組合」）である。ロンドンやブリストルの対外貿易商の出資によって成立したこの団体は、バハマの海賊問題の解決と同諸島への入植を目指していた。彼らはその希望を実現させるため、国王ジョージ 1 世やバハマの領主たちに手紙を送っていた。彼らの手紙からは、国王によってバハマを王領化してもらい、ロジャーズをその総督とすることで入植を主導しようという考えがうかがえる。彼らはまた、国王に対し海賊や外国の勢力に対抗するため同諸島への駐屯軍の派遣や彼らへの武器および食料の供給を要請していたが、自分たちでも船を使って海賊を撃退することを考えていたようである。また、入植者やその他必要なものの輸送にかかる費用は自分たちで負担するとしていた(17)。

商務院と「バハマ組合」の活動は、ロジャーズの友人で南方問題担当の国務大臣ジョゼフ・

(14)　*Calender of State Papers Colonial, America and West Indies*（以下 *CSPC*）, Volume 29, 1716-1717, 3 July 1716, No.240, 240.i. 及び R. A. Brock(ed.), *The Official Letters of Alexander Spotswood, Liutenant Governor of the Colony of Virginia, 1710-1722, Now First Pinted from the Manuscript in the Collections of the Virginia Historical Society*, Volume 2, Richmond: Virginia History Society, 1885, pp.168-172.

(15)　*CSPC*, Volume 28, 1714-1715, 14 December 1715, No.710. 及び薩摩、前掲論文、19 頁。

(16)　薩摩、前掲論文、22-23 頁。

(17)　*CSPC*, Volume 29, 1716-1717, 19 July 1717, No.657.ii, 657.iii.

アディソン（Joseph Addison）が、彼を商務院に紹介したことで一体化する。ロジャーズには船乗りとしての知名度があり、貿易商からの信頼も厚い。商務院は彼を歓迎し、バハマ総督として国王に推薦した[18]。また同じ頃、ブリストルの貿易商たちからロジャーズを支持する手紙が国王に送られた[19]。ロジャーズの評判に満足した国王ジョージ 1 世は、1717 年 9 月、彼をバハマ総督とすることに同意した。国王はバハマの通商と外交における重要性を認め、バハマの王領化と再建、軍艦の派遣と海賊の掃討を決定した[20]。商務院と「バハマ組合」の要求は完全に認められた。さらに、11 月からの議会ではバハマ防衛の予算が組まれ、海賊に関する法律も新たに制定された[21]。

バハマへの入植の準備は、提案通り、「バハマ組合」の資金で行われた。ロジャーズは入植者を募集し、同地で栽培する作物や、住居や砦を作る材料を揃え、また防衛を担う武装商船を購入した。すべての準備が整った 1718 年 4 月、ロジャーズはバハマ守備隊の総司令官かつ総督として、バハマ再建と海賊掃討の任務を背負いイギリスを出港したのである[22]。

3　ウッズ・ロジャーズと「貿易従事者」たち

(1)　ウッズ・ロジャーズの前半生

ロジャーズがバハマの海賊掃討の要求を実現させることができたのは、彼と共に活動して資金を提供した貿易商や、彼を商務院の活動に合流させた政治家がいたからだった。なぜロジャーズはこのように貿易商や政治家の助けを借りることができたのだろうか。その理由を検討するため、まず、ロジャーズの経歴について説明したい。

ロジャーズは、1679 年イギリスのプールに生まれた[23]。祖父の代からの船乗りで、父（息子と同姓同名、以降「父ロジャーズ」とする）は大西洋貿易に従事する商船船長だった。彼は主にタラ漁交易や奴隷貿易に従事していたが、「イギリス商業革命」の波に乗って財をなし、船舶を入手した。また、ブリストルに家を購入し、一家はそこに移り住んだ。当時のブリストルは大西洋貿易の中心地として繁栄していた。彼はその名士となり、広い人脈を築いた。ロジャーズが奉公した船乗りも、彼の縁で紹介された人物である。また、1705 年にロジャーズは結婚したが、妻の父親であるウィリアム・ウェットストーン（William Whetstone）は、父ロジャーズの友人だった。彼はイギリス海軍士官で、ジェントルマンである。彼はブリストルの名誉市

(18)　Cordingly, *op.cit.*, p.136. 及び薩摩、前掲論文、24 頁。

(19)　*CSPC*, Volume 29, 1716-1717, 19 July 1717, No.657.vii.

(20)　*CSPC*, Volume 30, 1717-1718, 3 September 1717, No.64.

(21)　薩摩、前掲論文、25-26 頁。この時制定された「ジョージ 1 世 4 年 11 号（Anno quarto Georgii I. c. 11.）」では、聖職者特権を適用しないなど、海賊の処罰や裁判の規定について補足がなされた（Danby Pickering(ed.), *The Statutes at Large from Magna Charta: To the End of the Eleventh Parliament of Great Britain, Anno 1761 [Continued to 1806]*, Volume 13, Cambridge: J. Bentham [etc.], 1799, pp.471-475）。

(22)　Cordingly, *op.cit.*, pp.138-140.

(23)　ロジャーズの生涯については、*Oxford Dictionary of National Biography: In Association with the British Academy: From the Earliest Times to the Year 2000*（2004 年版、以下 *DNB* とする）も参照。

民でもあり、その娘婿となったロジャーズも同じ称号を得た。[24]

さて、この同じ年、父ロジャーズが死亡した。[25]彼の船を譲り受けたロジャーズは、この船を用いて「世界周航（circumnavigation）」を行うことにした。世界周航とは、地球を一周しながらイギリスの交戦国の船を対象に私掠活動を行うという事業である。[26]これには長期間の航海に耐える船や食糧、優秀な船員を確保するため多額の資金が必要となる。ロジャーズは、自分がコネクションを持つブリストルの貿易商や市議会議員から出資を受け、この問題を解決した。[27]ロジャーズは 2 隻の船とそれに見合う数の船員や食糧を得て、1708 年にブリストルから旅立った。

(2) 「イギリス商業革命」と貿易商・船乗り

ロジャーズによる海賊掃討の実現の鍵となった貿易商や政治家とのコネクションは、彼が以前から形成してきたものだった。その人脈の中には父ロジャーズから受け継いだものもあったが、なぜ船乗りの彼らがこのようなコネクションを築くことができたのだろうか。

船乗りとは、船の種類に関わらずその航行に関わる乗組員を指す言葉である。ここには船長、高級船員（士官）、普通船員（水夫）が含まれるが、それぞれの社会的地位には大きな差がある。[28]特に船長や高級船員と普通船員の差は大きく、後者は「財産を持たず、それゆえ自らの労働力を売る」労働者だった。[29]しかし、船乗りのヒエラルキーの中で最上位に位置する船長は、普通船員とは収入の点でも社会的地位の点でも大きく異なる。[30]ここでは、ロジャーズの父や奉公先の船乗りが商船の船長であり、彼自身も私掠船の船長であることから、商船船長の立場について検討する。[31]

普通船員が貧しい労働者だとすれば、船長は裕福な経営者だった。それは船長の収入が他の船員より多かったからというだけではない。船長は船に乗って商品を管理し、航海の全責任を負うため、貿易の成功を左右する立場にあったからだ。そのため、貿易商にとって船長を選ぶことは貿易成功の鍵だった。[32]貿易商は、商品を傷めることなくかつ迅速に運び、利益をごまかさず報告する能力を持つ人物を船長として雇う必要があった。貿易商は船長を選ぶ基準として、その印象ではなく、これまでの実績、すなわち有力商人とのコネクションの有無を重視し

---

(24) Cordingly, *op.cit.*, p.31.

(25) *DNB* では、父ロジャーズの死は 1706 年とされる。

(26) 彼がこの事業を企画した背景には、父親から遺贈された船がフランスの私掠者に掠奪されたことと、私掠を奨励する法律が 1708 年に制定されたことがある（Cordingly, *op.cit.*, p.35）。

(27) ウッズ・ロジャーズ（平野敬一、小林真紀子訳）『世界巡航記』岩波書店、2004 年、9-10 頁。

(28) 金澤周作編『海のイギリス史――闘争と共生の世界史』昭和堂、2013 年、94 頁。

(29) レディカー、前掲書、32 頁。

(30) Nuala Zahedieh, *The Capital and the Colonies: London and the Atlantic Economy, 1660-1700*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010, p.160.

(31) ロジャーズが船長を務めた私掠船は、商船が国家から特別の認可を受けて行うもので、私掠船と商船の船長の区別はない（金澤編、前掲書、205-206 頁）。

(32) Zahedieh, *op.cit.*, pp.69-70.

た。[33]つまり、船長が貿易商とコネクションを持つのは当然で、ロジャーズたちもごく当たり前の船長だったと言える。

船長がコネクションを築いた対外貿易商は、この頃にはジェントルマンに近い存在となっていた。[34]その原因は、17 世紀後半から起こった「イギリス商業革命」だった。これにより、貿易商は裕福になり、商売をやめて土地を買い、ジェントルマンになってもおかしくないほどになった。だが、18 世紀前後には新たに土地を購入することが困難となっていたため、彼らは商売を続けたままジェントルマンのような生活を送りはじめた。18 世紀前半には貿易商をジェントルマンに近い存在とする見方が定着し、貿易商たちはその地位にふさわしい、上流階級とのコネクションを築くようになった。そのような交友関係形成の場として、たとえばブリストルでは、「ブリストル商人協会（The Society of Merchant Ventures of the City of Bristol）」があった。この協会の会員数は 18 世紀に急増し、1737 年に最大となった。[35]「ブリストル商人協会」はまた、有力な政治的圧力団体でもあった。貿易商たちは、この協会とつながりを持つ上・下院議員を通して政府や議会に請願を行い、自分たちが利害を持つ貿易、特に大西洋奴隷貿易に関する政策を有利に進めようとした。例を挙げれば、協会は 1698 年や 1709 年に王立アフリカ会社による貿易の独占やその復活に反対する請願を行い、そのどちらも実現させた。[36]貿易商たちは、政治家とのコネクションを通じ、間接的に政治に関与することが可能となった。

裕福になった船長たちも、このような貿易商の立場に近づいていった。船長はより高い地位を手に入れるため、ブリストルの名士だった父ロジャーズのように、船を所有し船主となることを利用した。貿易商は通常複数人で船舶を所有し、資本の投資先の一つとしていたが、豊かになった船長たちもここに加わり、貿易商とのコネクションを強化することで自らの地位を高めた。[37]このような船長たちは、肩書きとしては船乗りだが、実態はかなり貿易商に近い。貿易商や船主、船長の立場は絶対的ではなく、その境界はしばしば越境されるものだったのである。本稿では、対外貿易に主体的に関わることで利益を得る貿易商や船長などを、利害を共有する一つの集団とし、「貿易従事者」と呼称したい。

この観点からすると、船乗りのロジャーズが貿易商同様、上流階級とコネクションを形成していても不思議ではない。ロジャーズは「貿易従事者」として、貿易商だけでなく、アディソンのような政治家や文人たちとも交友関係を築いていた。[38]彼はこれを利用して海賊掃討を実現させたが、そもそも彼がこのようなコネクションを手に入れることができたのは、18 世紀

---

(33)　無論、航海の技術が最重要だったため、どのような教育を受けたかや最新の器具を扱えるかということも船長を選ぶ基準となった（*Ibid.*, pp.164-165）。

(34)　対外貿易商の社会的地位の上昇については、川北稔『工業化の歴史的前提――帝国とジェントルマン』岩波書店、1983 年に詳しい。

(35)　同上、308-310 頁。

(36)　一柳峻夫「イギリス帝国の諸相――18 世紀ブリストル商人の事例より」『帝京平成大学紀要』第 9 巻第 2 号、1997 年、61-62 頁。

(37)　Zahedieh, *op.cit.*, pp.144-147. 及び笠井俊和「17 世紀末におけるボストンの船乗りと西インド貿易」『西洋史学』第 235 号、2009 年。

(38)　Craton, *op.cit.*, p.94.

前半までに「貿易従事者」の社会的地位が向上していたからだった。

4 「貿易従事者」と「黄金時代」の海賊

(1) 世界周航とバハマ植民計画

ロジャーズは 1711 年に世界周航を終えて帰国したが、彼はその数年後に海賊掃討実現のための活動を開始する。そのきっかけは、一体どのようなものだったのだろうか。世界周航において、ロジャーズはスペイン船の拿捕やアレクサンダー・セルカーク（Alexander Selkirk）[39]の救出など華々しい成果を挙げた。利益は大きく、出資者たちへも十分な配当を与えることができた。彼は翌年にこの航海の記録を出版したが、これが評判となり、彼の航海者としての名声は国中に広まった[40]。事業は大成功に終わったかに見えたが、しかし、彼自身はこの成果からほとんど利益を得ることができなかった。出資者たちには利益を分配することができたが、ロジャーズ自身は持ち出しの方が多く、破産を宣言することになった。にもかかわらず、彼は乗組員たちから給料を横領したと訴えられた。妻との離婚も重なり、ロジャーズは精神的にも追い詰められてしまった[41]。

だが、ロジャーズはそのまま第一線を退きはしなかった。彼は破産状態から抜け出すためにマダガスカルの奴隷貿易に従事し、新たな事業として同島への入植を思いついた[42]。マダガスカルは 17 世紀末にインド洋で活動した海賊の拠点として繁栄したが、18 世紀にはかつてほどの勢いはなくなっていた[43]。ここに目を付けたロジャーズは、同島への入植を準備したが、途中でその計画を諦めてしまう。代わりに、彼はバハマ諸島への植民計画を開始した。この計画の変更には、ロンドンやブリストルの貿易商らの影響があると言われている。なかでも重要なのは、彼の友人でありロンドンの有力商人で船主のサミュエル・バック（Samuel Buck）だった[44]。大西洋貿易に従事していた彼は、バハマが「海賊の巣窟」のままでは西インド諸島との

---

(39) 太平洋の無人島で数年に渡る遭難生活を送った船乗り。ダニエル・デフォー（Daniel Defoe）の小説『ロビンソン・クルーソー（*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*）』（1719 年初版）のモデルになったとされるが、異論もある（Cordingly, *op.cit.*, pp.240-248）。

(40) 原題は、*A Cruising Voyage Round the World: First to the South-Seas, thence to theEast-Indies, and homewards by the Cape Good Hope. Begun in 1708, and finish'd in 1711*。邦訳も『世界巡航記』（書誌情報は註 27 参照）として出版されている。

(41) Cordingly, *op.cit.*, pp.102-103.

(42) ロジャーズが植民を思いついたのは、航海中に立ち寄った現インドネシア地域のオランダ領植民地の繁栄に感銘を受けたためとも言われている（*Ibid.*, pp.114-115）。

(43) マダガスカルが海賊活動の拠点として衰退したのは、1790 年代末に現地住民による白人への暴動が起こり、海賊の多くが同島を去ったためだった。だが、マダガスカルから完全に白人がいなくなったわけではなく、残って現地社会と融合した者もいた（Kevin P. Macdonald, *Pirates, Merchants, Settlers, and Slaves: Colonial America and the Indo-Atlantic World*, California: California World History Library, 2015, p.89, p.92）。

(44) ロジャーズがバハマへ入植を決めた詳細な経緯は不明で、コーディングリはバックの直接的な関与については断言を避けている（Cordingly, *op.cit.*, p.135）。一方、クレイトンはこの背景に、医師でジャマイカに地所を持つサー・ハンス・スロウン（Sir Hans Sloane）の影響があるとしている（Craton, *op.cit.*, p.94）。

貿易は困難だと考え、他の「貿易従事者」と共に「バハマ組合」を結成した[45]。バックに誘われたことで、ロジャーズは入植計画の対象をバハマに変更し、「バハマ組合」に参加した。それ以降、ロジャーズはバハマへの入植と海賊鎮圧を実現するための活動を積極的に率いるようになる。ロジャーズの活動は、アディソンが彼を商務院へ紹介し、またブリストルの「貿易従事者」たちが国王へ彼を推薦したことで実を結ぶ。

(2) 「黄金時代」の海賊

ロジャーズの活動には、海賊掃討を求める「貿易従事者」たちの関与があった。彼らはなぜバハマの海賊掃討を望んだのだろうか。その理由を考える際に参考となるのが、「海賊活動の黄金時代」に生き、当時の海賊の記録を残したチャールズ・ジョンソン（Charles Johnson）[46]の次のような記述である。「西インド諸島の海賊は非常に手強く、おびただしい数にのぼり、この方面のヨーロッパ諸国の貿易を妨げるまでになっている」[47]。同じように、海賊が貿易に甚大な被害を与えているという意見は、新聞や雑誌などで数多く見られる[48]。しかし、当時のイギリスでは対外貿易が愛国的行動とされ、非常に重視される傾向があった[49]。そのため、彼らが読者の興味を引こうと、海賊による被害を実態以上に誇張している可能性も排除できない。1715年から始まる「海賊活動の黄金時代」は、実際どの程度貿易にとって脅威となっていたのだろうか。

海賊活動の規模についてまず説明する。1716年から1718年の間に海賊活動に従事した船乗りの数は、同時代の植民地総督や商人の報告から推測するに、1,500人から2,000人にのぼるとされている[50]。同時代の海軍水夫が13,000人程度であることを考えるとこれは驚異的である。海賊の被害に遭った船もその規模に見合うだけ報告されており、その数は「黄金時代」全体で2,400隻を上回る[51]。海賊の多くは、大西洋とカリブ海、なかでも北米や西インド諸島、西アフリカなど、特にイギリス船による交易量が多い場所で掠奪を行った[52]。彼らの掠奪は、主要な貿易港のすぐ近くで行われることもあった。このような場合、その付近を経由する貿易のすべ

(45) Cordingly, *op.cit.*, pp.134-135.

(46) 『海賊列伝（*A General History of the Robberies and Murders of the most notorious Pyrates, and also their Policies, Discipline and Government, From their first Rise and Settlement in the island of Providence, in 1717, to the Present Year 1724*）』（1724年初版発行）の著者。経歴は不明で、その正体についてはデフォーをはじめ様々な説がある。描写の詳細さから元海賊とも言われるが、コーディングリは、これはロジャーズが彼に情報を提供していたからではないかと推測している（Cordingly, *op.cit.*, pp.250-252）。

(47) チャールズ・ジョンソン（朝比奈一郎訳）『海賊列伝（上）――歴史を駆け抜けた海の冒険者たち』中央公論新社、2012年、19頁（以下、ジョンソン「海賊（上）」とする）。

(48) Margarette Lincoln, *British Pirates and Society, 1680-1730*, London: Ashgate, 2014, pp.85-86.

(49) リンダ・コリー（川北稔監訳）『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、2000年、60-65頁。

(50) レディカー、前掲書、37-39頁。

(51) これらの数字は、有名な海賊たちがとらえた船の数を参考にしてそれ以外の海賊がとらえた船の数を推測し、その両方の数字を合計したものである（同上、42-45頁）。

(52) バハマの海賊掃討以降はインド洋も加わる（コーディングリ編、前掲書、328頁）。

てが停止し、被害は個々の商船に留まらなかった。(53)

海賊による掠奪の被害に遭うと、商船は単に積み荷を奪われるだけではすまない。海賊は掠奪の際に様々な暴力行為を働き、自分たちに必要のない積み荷や拿捕した商船そのものを破壊して去っていくことがあった。彼らの暴力行為は、商船の乗組員に対しても行われた。(54) たとえば、1719 年ころ海賊エドワード・イングランド（Edward England）に拿捕されたイギリスのスキナー船長は、彼の仲間の海賊によって殺害されている。(55) 海賊はまた、船医や船大工のような技術者たちを無理やり連行することもあった。普通船員が海賊の暴力の対象となることは少なかったが、船員たちの中には自ら進んで彼らの仲間入りをする者もいた。(56) 海賊による掠奪は、商船に物的、人的被害を与えていた。

ロンドンやブリストルに暮らし大西洋貿易に従事する「貿易従事者」たちは、このような海賊の脅威を誰よりもよく理解していた。「バハマ組合」の設立者であるバックは、「バハマ組合」結成の直前、1716 年に西インドへ派遣した 2 隻の船の片方を海賊によって掠奪され失った。(57)「バハマ組合」以外の「貿易従事者」たちも海賊による掠奪の被害に遭っていた。アメリカ周辺と交易を行う「貿易従事者」のあるグループは、1717 年に国王へ海賊に関する苦情を送ったが、彼らはその書簡の中で、バハマの海賊によって深刻な損害を蒙ったと述べている。(58) 大西洋貿易に関わる「貿易従事者」たちは海賊の被害を直接受けることから、政府中央部の政治家や国会議員などよりも、バハマの海賊活動に対し危機感を抱いていた。これが、「貿易従事者」たちが海賊鎮圧を求めた理由だった。

5　海賊鎮圧の実行

(1)　バハマの平定

1718 年 7 月、ロジャーズはバハマ諸島の中心部ナッソーに到着した。彼はまずバハマに集まる海賊たちに恩赦を与えた。多くの者がこれを受け入れたが、中にはチャールズ・ヴェイン（Charles Vane）のようにこれまでと同様に掠奪を続けるために恩赦を拒否し、バハマから逃走する者もいた。(59) このような海賊に対し、ロジャーズは武力による討伐を開始した。だが、ロジャーズと共にイギリスからやってきた艦隊は、その指揮官がロジャーズと仲違いをしてほとんど頼りにはならなかった。(60) 代わって海賊討伐の中心となったのは、降伏して恩赦を受け、拿捕認可状を与えられた元海賊たちだった。

---

(53)　ジョンソン「海賊（上）」、89-91 頁。
(54)　レディカー、前掲書、44-45 頁。
(55)　ジョンソン「海賊（上）」、146-148 頁。
(56)　レディカー、前掲書、62-64 頁。
(57)　Cordingly, *op.cit.*, p.134.
(58)　*CSPC*, Volume 29, 1716-1717, 19 July 1717, No.657.iv.
(59)　ジョンソン「海賊（上）」、38-40 頁。
(60)　Cordingly, *op.cit.*, pp.184-186.

バハマ周辺の治安回復には、近隣の英領植民地の活動も貢献した[61]。たとえば、スポッツウッド副総督が率いるヴァージニアは、海賊の討伐に成功した者への報奨金を設定した[62]。植民地主導で駐留海軍やその他の戦艦による討伐も行われ、スポッツウッドはメイナード中尉（Robert Maynard）を派遣し、悪名高い海賊「黒髭」ティーチ（Edward Teach）の殺害に成功した。ヴァージニア以外でも、サウスカロライナに駐留するレット大佐（William Rhett）は、「海賊紳士」ボネット（Stede Bonnet）の一味を逮捕した[63]。ジャマイカ総督は海賊討伐のための拿捕認可状を発行し、商船を海賊討伐に当たらせた[64]。最も重要だったのが、以前はなおざりだった海賊の裁判や処刑が植民地でも実行されるようになったことだった。ボストンやニューヨーク、ポートロイヤルなど植民地の主要な港のほとんどで海賊の処刑が実施され、前述のボネットもチャールストンで処刑された[65]。ロジャーズ自身は、裁判を主導する権限があるのか曖昧だったため捕らえた海賊をそのままにしていたが、サウスカロライナ総督の励ましにより、海賊の裁判と処刑を行うことを決意した[66]。その結果、彼は 1718 年に「海賊活動の黄金時代」で 2 番目に多い 110 人の海賊を処刑することができた[67]。

このような植民地の協力のかいあって、「バハマ組合」は 1720 年に、バハマから海賊が去り、アフリカへ逃亡したと本国へ報告することができた[68]。バハマ周辺の討伐から逃れた海賊たちは、報告にある通り、他の海域へと移動し、「黄金時代」は 1720 年代半ばまで続いていくことになる。だが、ヴェインが処刑されたことで、バハマ近海における海賊の脅威は 1721 年ころに消滅した[69]。バハマの海賊掃討は完了したのである。

(2) 「黄金時代」以前の海賊と植民地の共存関係

ある海賊は処刑執行の直前、ロジャーズを指して「新しい総督は情を知らねえ」と口にしたとされる[70]。彼の言う通り、かつてバハマではロジャーズほど海賊に厳しい総督は存在しなかった。同じことは、バハマ以外の大西洋に面する英領植民地にも当てはまる。

前述のように、17 世紀前半から後半には、大西洋世界でバッカニアがイギリス本国と植民地の両方と共存関係を築いていた。特に、彼らの拠点である北米や西インドの英領植民地との関係は密接なもので、植民地政府は彼らに拿捕認可状を発行し、スペイン船に対する掠奪を奨

(61) 例外もあった。ノースカロライナでは、総督が海賊ティーチに対し、彼の掠奪品の利益の一部と引き換えに便宜を図っていたと言われる（Earle, *op.cit.*, pp.193-194）。
(62) ジョンソン「海賊（上）」、96-97 頁。
(63) Earle, *op.cit.*, pp.189-194. 及びジョンソン「海賊（上）」、95-102 頁、125-129 頁。
(64) Cordingly, *op.cit.*, p.190.
(65) レディカー、前掲書、12 頁。及びジョンソン「海賊（上）」、130 頁、142 頁。
(66) Cordingly, *op.cit.*, p.160.
(67) 最も多くの海賊が処刑されたのは、1722 年の西アフリカにおいてだった（レディカー、前掲書、45 頁）。
(68) *CSPC*, Volume 31, 1719-1720, 3 February, 1720, No.545.
(69) ジョンソン「海賊（上）」、188 頁。及び薩摩、前掲論文、29 頁。
(70) チャールズ・ジョンソン（朝比奈一郎訳）『海賊列伝（下）――歴史を駆け抜けた海の冒険者たち』中央公論社、2012 年、447 頁。

励した。その目的は、できたばかりで貧しい植民地を、バッカニアたちがもたらす掠奪品によって豊かにすることだった。[71] 植民地の防衛力として、バッカニアたちを利用する狙いもあった。支配層以外の植民地住民もバッカニアとの協力で利益を得た。商人たちはバッカニアが持ち込む掠奪品を買い取り、転売することで金銭を稼ぐことができたし、海賊たちは手に入れた財をすぐに消費したので、港町で飲食店や売春宿を経営する人々も利益を得た。[72] このようなバッカニアとの共存関係で有名なのが、ジャマイカのポートロイヤルである。同港はバッカニアの拠点として、1680 年代まで繁栄を続けた。[73]

海賊と植民地の協力関係が、植民地住民とバッカニアの出自の類似性や親近感から成立していたと見ることもできる。[74] アメリカ大陸やカリブ海の島々へ入植してきたのは、不本意ながら本国を捨て新大陸に逃れてきた人々だった。[75] 彼らはみな植民地でも貧しい暮らしを送っていたが、この事情はバッカニアも同じだった。

しかし、植民地とバッカニアの関係は 1680 年前後から徐々に変容していく。西インド諸島植民地の多くは経済発展を遂げたことで海賊への反発を強め、駐留するイギリス海軍が彼らを討伐し始めた。だが、バハマ諸島や北米は海賊との協力を続け、特に北米は海賊の拠点として有名になった。ニューヨークのフレッチャー総督（Benjamin Fletcher）をはじめ、植民地政府の総督や役人たちは、率先して海賊たちに庇護を与えた。[76] 植民地の人々は海賊による掠奪航海に必要な船や食糧、金銭を提供した。海賊が植民地へ帰ってきた後、彼らに掠奪品の販売ルートを提供するのも植民地の人々である。港町では、バッカニアの頃と同様、海賊に対して様々な娯楽が提供された。[77] 両者のこのような関係は、単なる商売上のものに留まらなかった。植民地住民は、海賊を自分たちの町に富をもたらしてくれる存在と認識し、彼らを捜索し逮捕する人々を敵として憎むことさえあった。海賊が裁判にかけられても、植民地の陪審員によって結局は無罪になったというエピソードは、そのことをよく表している。[78] 両者の関係は、前述のようにスペイン継承戦争が始まったことで大々的には見られなくなるが、ロジャーズが航海記に記しているように、完全になくなりはしなかった。[79]

---

(71) Robert C. Ritchie, *Captain Kidd and the War against the Pirates,* Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1986, pp.15-16.

(72) Pérotin-Dumon, op.cit., pp.216-217.

(73) Ritchie, *op.cit.*, p.16.

(74) C・ヒルは、植民地の人々と海賊の共通点として、非国教徒や急進主義的な思想の持ち主という点を指摘している（クリストファー・ヒル「急進的な海賊？」『17 世紀イギリスの民衆と思想――クリストファー・ヒル評論集Ⅲ』法政大学出版局、1998 年、240 頁、251-252 頁）。彼に影響を受けたレディカーは、両者の共通点として、貧しく社会から抑圧された者である点を重視した。そのため、レディカーは民衆、特に貧しい船乗りたちは常に海賊たちを支持していたとしている（レディカー、前掲書、133 頁）。

(75) エリック・ウィリアムズ（川北稔訳）『コロンブスからカストロまで――カリブ海域史、1492-1969（Ⅰ）』岩波書店、1978 年、113-114 頁。

(76) Earle, *op.cit.*, pp.113-114. 及びコーディングリ編、前掲書、296-299 頁。

(77) Earle, *op.cit.*, pp.115-116. 及び Ritchie, *op.cit.*, pp.37-39.

(78) コーディングリ編、前掲書、296-297 頁。

(79) ロジャーズ、前掲書、21 頁。

表 1

年次	輸入量
1663–	148.0
1669–	190.5
1690–	257.0
1698–1700	471.1
1701–1705	357.9
1706–1710	401.3
1711–1715	484.6
1716–1720	653.2
1721–1725	671.2
1726–1730	860.9

※単位は1,000cwt、年平均
（1cwtは112ポンド）

池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開』、33 頁を元に執筆者作成。

表 2

出港

目的地	船舶数（隻）	割合（%）
西インド諸島	164	60.3
イギリス本国	13	4.8
その他	95	34.9
合計	272	100.0

※1686年から1688年までの合計

入港

出発地	船舶数（隻）	割合（%）
西インド諸島	117	54.9
イギリス本国	16	7.5
その他	80	37.6
合計	213	100.0

※1686年から1688年までの合計

笠井俊和「17 世紀末におけるボストンの船乗りと西インド貿易」、23 頁を元に執筆者作成。

(3)　植民地と「黄金時代」の海賊

しかし、スペイン継承戦争後には、ヴァージニアやサウスカロライナ、バミューダなど植民地から海賊に関する苦情が本国へ届けられるようになった[80]。またロジャーズによる討伐が始まると、植民地は海賊ではなく彼らを討伐するロジャーズに協力した。それは、スポッツウッドが述べるように、海賊が「イギリスの商業に対し脅威となる」ことを懸念したためだった[81]。

だが、英領植民地のほとんどが海賊と協力していた 17 世紀には、貿易は 18 世紀ほど重要ではなかった。この状況が変化したのは、西インド諸島植民地で砂糖プランテーションが発達した 17 世紀後半以降である。砂糖の原料となるサトウキビの栽培がカリブ海の英領植民地で始まったのは、17 世紀半ばころだ[82]。同地域の砂糖は、初めは上流階級の奢侈品として本国へ輸出されていたが、次第に中産階級以下も消費するようになった。これにより、イギリスの砂糖の消費量は莫大なものになり、西インド産砂糖の輸入は段々と増加していった[83]。それを示したのが表 1 である。1663 年にイングランドとウェールズが西インドから輸入した砂糖は 148,000cwt だったが、輸入量は順調に増加し 17 世紀末の 1698 年から 1700 年には年平均で 471,100cwt と、1663 年の 3 倍以上となった。18 世紀初頭にはスペイン継承戦争の影響でやや減少するが、1711 年から 1715 年には過去最高の値を記録した。西インド産砂糖は大西洋貿易の主要商品で、この貿易の活況が「イギリス商業革命」につながった。これがロジャーズら「貿易従事者」の本国における社会的地位の上昇の契機となったというのは、上述の通りである。イギリス本国における砂糖輸入量の増大は、西インドにおける砂糖生産の拡大と連動していた。

(80)　*CSPC*, Volume 27, 1712-1714, 22 April 1714, No.651. 及び *CSPC*, Volume 30, 1717-1718, 18 June 1718, No.556.

(81)　Brock(ed.), *op.cit.*, p.170.

(82)　英領西インドで最初にサトウキビの生産を始めたのはバルバドスだった。これ以降、サトウキビを栽培する地域は急速に拡大し、18 世紀前半の時点では、ジャマイカやリーウォード諸島など、西インドのほとんどで栽培が行われていた（ウィリアムズ、前掲書、136-140 頁）。

(83)　Richard B. Sheridan, 'The Formation of Caribbean Plantation Society, 1698-1748', P. J. Marshall(ed.), *The Oxford History of the British Empire, Volume 2: The Eighteenth Century*, New York: Oxford University Press, 1998, p.399.

砂糖生産の拡大は、植民地に莫大な富をもたらすと同時にその社会を変質させ、対外貿易がより大きな意味を持つようになった。プランテーションの産品を輸出して利益を得るからというだけではない。社会を構成する様々な要素が貿易なしでは成り立たなくなったためだ。例を挙げれば、プランテーションにおける労働の中心がヨーロッパ系白人年季奉公人からアフリカ系黒人奴隷に移行し、プランターは労働力を本国の貿易商が主導する大西洋奴隷貿易を通じて入手しなければならなくなった[84]。だが、慣れない気候と過酷な労働のため、奴隷の死亡率は高く、出生率は低かった。そのため安定的にプランテーションを経営するには、絶えずアフリカから奴隷を輸入し続けることが必要だった[85]。奴隷たちの食糧も外部から輸入していた。奴隷ばかりではない。植民地の自由人たちの食糧や、その他プランテーションで用いる道具などの日用品も対外貿易に頼っていた。植民地全体が利益の大きな砂糖の生産に特化するようになり、モノカルチャー化していたからである[86]。砂糖生産の拡大に伴いこのような社会が成立したことが、17 世紀後半に西インドの多くが海賊に対し反発を強めた原因だった。

この西インドの砂糖植民地に日用品を供給していたのが、イギリス領北米植民地だった。たとえばマサチューセッツ植民地は、穀物や魚など食料品や、砂糖を詰める樽を作る木材を西インドへ輸出していた[87]。この西インドと北米間の交易は、前者の日常生活を支えるだけでなく、後者の経済の支えでもあった[88]。表 2 を見ればわかりやすいだろう。これは、1686 年から 1688 年に北米北部のボストン港から出港した船と、同港へ入港した船の数をその目的地・出発地と共に記したものである。この 3 年間でボストンを出港した船は 272 隻あり、この内西インドを目的地とする船は 164 隻と 60％以上を占めている。これは、イギリス本国やその他の地域よりも圧倒的に多い。また、ボストンへ入港した船も、合計で 213 隻のうち約 55％が西インドから帰港しており、やはり最多となっている。船の総トン数についても、本国へ向かった船は 1,320 トンで、西インド諸島へは 7,908 トンだった。ここからも、北米植民地にとって最大の取引先は西インド諸島だったことがわかる[89]。だが、北米と西インド間の交易は、プファルツ継承戦争やスペイン継承戦争など、断続的に続く戦争により、世紀転換期に一時後退する[90]。

1713 年にスペイン継承戦争が終了して英仏の抗争が落ち着くと、この交易は再び活発化し

---

(84) プランテーションが発達した社会では、大プランターが広大な土地を占有して格差が広がり、社会的上昇の機会が限られるようになった。そのためヨーロッパからの移民が減少し、プランターは安価な労働力として黒人奴隷に頼らざるを得なくなり、労働力の移行が起こった（池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開――チェサピーク湾ヴァジニア植民地を中心として』ミネルヴァ書店、1987 年、46-47 頁、213 頁）。

(85) Sheridan, op.cit., pp.405-406.

(86) Ibid., p.395.

(87) Jacob M. Price, 'The Imperial Economy, 1700-1776', P. J. Marshall(ed.), *op.cit.,* p.89. 及び笠井、前掲論文、24-25 頁。

(88) 北米植民地の大半は換金作物に恵まれず、貿易によって生計を立てていたが、南部では煙草などのプランテーションが発達した（川北、前掲書、205 頁）。南部における社会の変質に関しては、池本、前掲書及び和田光弘『紫煙と帝国――アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済』名古屋大学出版会、2000 年を参照。

(89) 笠井、前掲論文、23 頁。

(90) 植民地戦争は大西洋貿易にも影響を与えたが、植民地間貿易の方がその影響は大きかった（Ian K. Steele, *The English Atlantic 1675-1740: An Exploration of Communication and Community*, New York: Oxford University Press, 1986, p.36）。

た。18 世紀初頭から、サウスカロライナで西インドの住民の食糧となる米のプランテーションが成長したこともあり、両者の交易は 17 世紀以上に盛んになった[91]。また、表 1 で示したように、この時期は西インド産砂糖の輸出も更に増加した。西インドや北米の支配層は「貿易従事者」やプランターだったが、彼らはこれらの貿易の成長でかつてよりも多くの利益を得るようになった[92]。しかし、同時期には海賊活動も盛んになって貿易を妨害したため、支配層は海賊に敵対的になり本国に対策を求めるようになった。決定的だったのは、1717 年の「黒髭」ティーチによるチャールストン付近での掠奪だ。植民地の主要港チャールストンが機能を停止したことで周辺の貿易は全て麻痺し、植民地住民は多大な被害を蒙った[93]。彼らは海賊が自分たちの敵だという思いを強くし、翌年から始まるロジャーズの海賊討伐に協力したのだった。

6　おわりに

ウッズ・ロジャーズは、自身がナッソーに到着した日のことを次のように記している。「私は（ナッソーに）上陸し、砦の所有権を得た。私はここで、国王陛下の委任状を、役人や兵士、その他の集まった 300 人ほどの群衆の前で読み上げた。彼らは武器を手にして私を歓迎し、たちまち降伏した。彼らの顔には、再び政府が建設されることに対する喜びが浮かんでいた[94]」。バハマ諸島の人々にとって、ロジャーズの到着、すなわちイギリスによる統治の再開が喜ばしいことだったかはわからない。だが、ロジャーズらイギリス本国の「貿易従事者」や、周辺植民地の支配層にとってバハマにおける秩序の回復が福音だったことは間違いない。

大西洋世界の海賊は、大西洋やカリブ海における貿易にとって脅威となっていた。そのため、ロジャーズは海賊の被害を直接受ける「貿易従事者」らと共に、バハマの海賊掃討実現を目指して活動した。「貿易従事者」らは 17 世紀後半からその地位を上昇させ、18 世紀には政治家を含む上流階級とのコネクションを形成しており、ロジャーズもそれを用いて自身の希望を実現させた。ロジャーズによる掃討が始まると、大西洋に面する英領植民地は、以前から海賊鎮圧を本国に要求していたこともあり、彼を助けた。18 世紀の植民地では、プランテーションの発達により、前世紀よりも貿易が価値を持つようになっていたからだった。

このように、ロジャーズによるバハマの海賊掃討作戦の決定と実行には、イギリス本国と植民地の双方が深く関わっていた。しかし、両者は以前から海賊鎮圧を強く願っていたわけではない。その姿勢に変化が生じたのは、貿易に利害を持つ「貿易従事者」らが本国で社会的地位を上昇させたためだった。また、プランテーションが発達し、植民地の支配層にとって貿易の持つ意味がかつてより大きくなったからだった。これらの変化は、イギリス本国と植民地が、大西洋を囲む「イギリス帝国」として一体化する過程と連動していた。この帝国の各部は貿易

(91)　*Ibid.*, pp.32-33, p.257.
(92)　Sheridan, op.cit., p.395. 及び池本、前掲書、108 頁、235-237 頁。和田、前掲書、49-52 頁。
(93)　ジョンソン「海賊（上）」、89 頁。
(94)　Cordingly, *op.cit.*, p.153.

によって結びつき、バハマの海賊掃討においては、その貿易の敵を排除するため帝国全体が協力したのだった。

バハマ周辺の成果に自信を得たイギリス帝国は、これ以降、大西洋やインド洋など各海域の海賊掃討にまい進し、「海賊活動の黄金時代」は 1726 年に終焉を迎える[95]。それによって帝国内の貿易はますます伸長し、イギリス帝国は「商品の帝国（an empire of goods）」としてさらにその内部の結束を強めていく[96]。ここには、1783 年にアメリカ合衆国としてイギリス帝国から離脱する北米植民地も含まれていた。

本稿では、かつて大西洋世界の海賊活動を支援していたイギリス本国と植民地が、なぜ 18 世紀に彼らを鎮圧するようになったのか、その理由を考察した。しかし、個々の英領植民地の事情については、十分に解明できたとは言い難い。当時イギリス領の植民地の状況は、経済のあり方や社会構造など様々な点で大きく異なっていた。だが、本稿ではこの差異を十分に考慮することができなかった。今後は個々の英領植民地に注目し、海賊掃討が行われた背景をより具体的に解明することを課題としたい。

(95) Earle, *op.cit.*, p.206.

(96) T. H. Breen, 'An Empire of Goods: The Anglicization of Colonial America, 1690-1776', *Journal of British Studies*, 25, 1986, pp.496-499.